

## 時空の漂泊

(二〇〇六年三月十五日 第二十五号)

前田勲男

### 都心の移り住み 直下地震

さる二月十六日、東京都防災会議から「首都直下地震による東京の被害想定」という報告書が発表され、その内容が各紙でも紹介された。

「阪神淡路大震災」並のM七・三の「東京湾北部地震」が起こった場合は、二三区のうち足立、江東など河川が運んできた土砂が堆積した地盤の弱い土地の東部を中心に約五割の地域が震度六強の揺れを記録する。十万棟以上の家屋などが全壊、

M・マグニチュード (magnitude) 地震の規模 (エネルギー) を表す尺度。いくつもの算出計算式があるが、いずれも地震波の最大振幅を基に算出される。ちなみに阪神淡路大震災もM七・三、関東大震災はM七・九だったという。Mの計算式は「対

四十万棟近くが半壊。火災で約三十万棟が焼失。死者数は約五千人に達すると想定される。

三割強の世帯が断水し、約二割の世帯が停電し、ガス供給も止まる。公共交通機関の停止などにより外出中の三割以上、三百万人以上が帰宅困難になる。一万台近いエレベーターが停まり、人が閉じこめられる。

こんなことが各紙で報道された。テレビのニュースでも報道された。しかし、注目されたのは一時いっときのことだった。毎日、毎日、これでもかこれでもかと興味をそそるだけが目的のように味噌も糞も一緒に流され

数」が入ったもので、Mが一増えるということは、エネルギーとしては、約三〇倍になることを意味している。地震強さを身体感覚や周囲の状況によって、いくつかの階級に区別したものの、深度六とは「烈震」

る情報の洪水に埋没してしまった。

このニュースを聞いて、僕は直ちに東京都のホームページにアクセスした。最近では情報公開が進んでおり、報告書全文が掲載されているに違いないと思った。しかし、まだホームページは更新されておらず、報告書は見当たらなかった。

#### お台場海浜公園

つい先日、三月五日の日曜日、レインボーブリッジを渡って、東京の人気スポットになっている「お台場海浜公園」に初めて行った。

朝起きたら数日ぶりに晴れ上がり暖かい。外出して、体調を崩して溜

——家屋の倒壊は三割以下、山くずれが起き、地割れを生じ、多くの人々が立っていることができない程度の地震とされている。

めてしまった雑件を新宿の伊勢丹などに朝一番で出掛けて一気に片付けた。その後、まったくの突然の思い付きで、「お台場海浜公園」に車を走らせた。変わったところで昼飯を楽しみたくなったからだ。

二月中旬、イタリア、ミラノ郊外のホテルで開催される二日間の会議に出席するため、三泊四日（機中一泊）の強行軍で行った。もともと寒いのは苦手の上に、トリノの冬期オリンピックとぶつかり混雑しているうで、行くのは憂鬱<sup>ゆううつ</sup>だった。でも、大切な本業なので逃げられない。それで渋々ながら行った。

戻って数日後、カンボジアのシェムリアップに二泊三日（機中一泊）



の強行軍で、上智大学アジア人材養成研究センターに新システム導入のためのインフラの実態調査と改善計画のとりまとめのために出かけた。これは仕事ではない。ボランティアである。しかし、大学の予算の関係上、改善計画をまとめ、その承認

を得て必要な機材の調達を年度内にやらなければならない、時間的な余裕がないという事情を聞かされると、頼みを断ることはできなかった。それで協力を快諾してくれた電源メーカーの専門家と二人で出掛けた。

ミラノでの会議は出席して本当に有意義であったし、上智大学アジア人材養成研究センターのインフラ改善計画もまとめ上げることができ、それで新システム導入が具体的に動き出したのも良かったのだけれど、その後、僕の身体が突然変調をきたした。夜十時頃、どうも変なので体温計で測ったら、四十度近い高熱だった。

取りあえず手元にあった薬を服用し、翌朝、主治医のいる東京女子医

大に行った。歩いて一分も掛からな  
いところに居続けている意味がこ  
ういう時には本領を發揮する。

いろいろ検査したけれど、インフ  
ルエンザでも鳥インフルエンザでも  
カンボジアなどの風土病でもなかつ  
た。結局、原因不明。多分、疲労蓄  
積だろうということだった。念のた  
めにということで薬を処方してもら  
った。

高熱でも食欲は衰えなかったし、  
薬を服用し、熱も下がったのだが、  
身体の芯しんが変な気分はなかなか消え  
なかった。ようやく、それが少し晴  
れ、溜まった雑件を片付ける気持ち  
になった時のことだった。

「お台場海浜公園」の中心部の駐  
車場は長い待ち行列であり、臨時駐  
車場の標識が目に入ったので迷わず  
に向かった。お目当ての場所からか  
なり離れた場所だったが、空すいてお  
り、直ちに車を駐車させることがで  
きた。



天気が良く、臨時駐車場が離れて  
いることなど苦にならなかった。浜  
辺を歩いてレストランなどがある人  
気スポットに向かった。

何もかもが新鮮な驚きだった。レ  
インボーブリッジ開通は一九九三年  
夏で、それからすでに十年以上たっ  
ている。計算してみたら、すでに何  
百回も車で渡ったことになる。

しかし、肝心のお台場に降りたの  
は「東京ビッグサイト」で開催され  
る各種の展示会の時だけだった。合  
計して十回ぐらいで、しかも、その  
時は、いつも会場に直行し、そして  
直帰するだけだった。車で橋の上か  
ら眺める見慣れた風景と、下での眺  
めとはまったく違っていた。



砂浜は清掃が行き届き、綺麗だ。ヘッドフォンで音楽を聴きながらジョギングする人、アサリを採っている親子、ウインドサーフィンを楽しむ人。林立するマンションのベランダには、布団ふとんなどが干されている。人工的な街。オフィスだけの街。



そんなイメージしか持っていなかっただけに、驚きの連続だった。お目当てのレストランなどがあるショッピングビルに着いて、また驚かされた。この頁の一番上の写真の中央、木立の上に見える中層の横長の建物である。



各階とも海側は幅広いウッドデッキである。親子連れで、カップルで、一人で、あるいは犬を連れて散策しており、大変な賑わいだ。サンフランシスコのフィッシャーマンズ・ワーフ（漁師波止場：Fisherman's Wharf）の一面にある、再開発で観光

スポットになったピア39 (Pier 39: 第三十九棧橋) を思い起こさせる雰囲気だった。

## 首都直下地震

日溜まりの椅子に陣取り、リラックサして軽食をとりながら、久しぶりに目の前を往来する人たちのヒューマン・ウォッチングを楽しんだ。

その時、突然、ここは「十三号埋立地」だということを思い出した。

いまは港区台場という住所だけでなく、もともとは「十三号埋立地」と呼ばれていたところだ。「十三号埋立地」という名前の代わりに、港区台場、品川区東八潮、江東区青海などの名称が使われている事実気が付いた。

そして、もう十年以上も前になるが、一九九五年一月十七日の阪神淡路大震災で、神戸市が「ナウさ」と「眺望」を売り物にしていた人工島の「神戸ポートアイランド」全体が液状化現象で水浸しになったことを思い出した。

数十メートル地下の地盤まで基礎を打ち込んで建設された高層ビルは、倒壊こそ免れたものの、大きな段差が地表との間に生じ、上下水道やガスや電力などのインフラがやられて、使えなくなってしまう。この人工島と陸とを結ぶ命綱の「神戸大橋」の橋脚もずれ、そこにあった水道管も陥落し、「孤島」になってしまった。

「神戸ポートアイランド」が完成してから間もない頃、仕事の関係で、自慢の

モノレールにも乗り、そこに建設された最新のホテルにも宿泊しただけに、そんな影像を見て、衝撃を受けたことを思い出した。

その衝撃の影像が、目の前の平和でのどかな光景に重なった。そうしたら、気分がすっかり醒めてしまった。早く、はるかに安全なところにある自分のマンションに戻りたくなかった。いつ「首都直下地震」は起きてもおかしくない、十年以内に「首都直下地震」が起こる確立は九割ぐらいというのが専門家の一致した見解だと、いつも思っているからだ。

「君子は危うきに近寄らず」という。君子(学識・人格ともに優れ、徳行の備わった人)は、身を慎み、

危険なことは初めから避ける——  
たしか、そんな意味だったと思う。  
孔子（紀元前五五一年〜四七九年）が紀元  
前七百年頃から五百年頃までの二百  
年以上の時代をまとめた中国の史記  
「春秋」に出てくる一文である。

君子とはほど遠い存在だし、しか  
も危険を冒すことなど厭わないけれ  
ど、その前の「身を慎み」という言  
葉には反論はできない。君子でなく  
ても、ともかく無意味な危険は避け  
た方がよいという気分に襲われた。

ちようど満席になって空席待ちの  
人の行列ができ始めたので、支払い  
を済ませ、レストランを後にした。

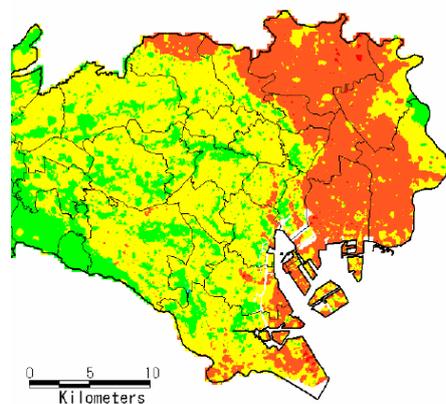
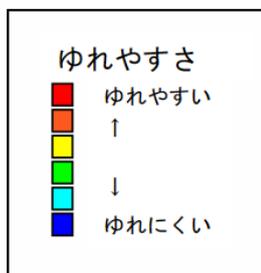
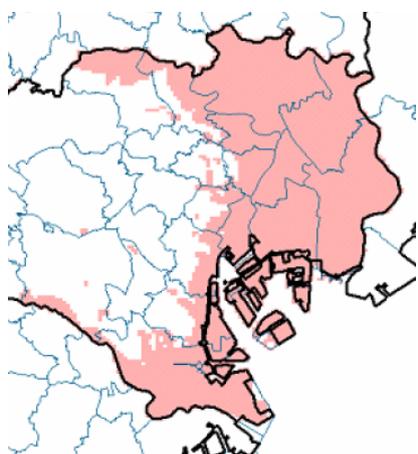
自宅に戻り、一息ついたところ

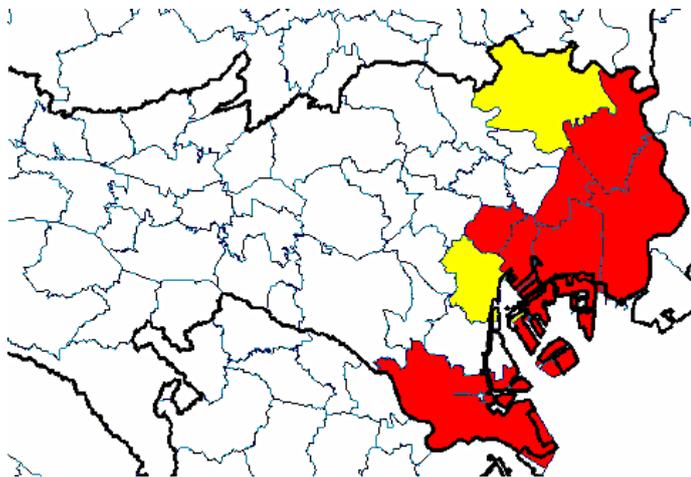
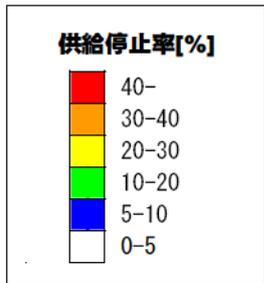
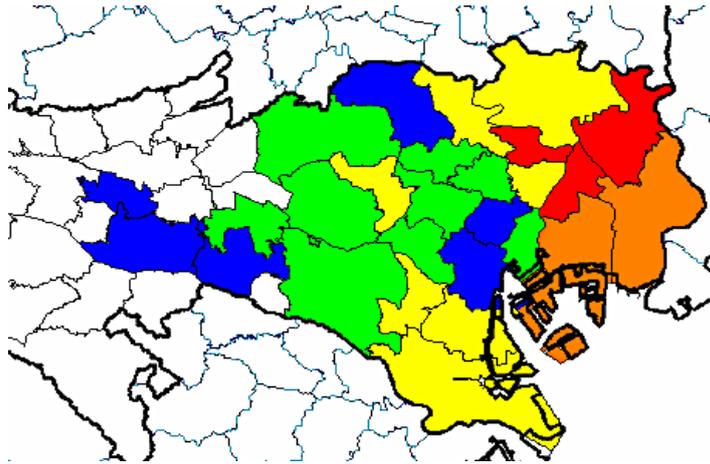
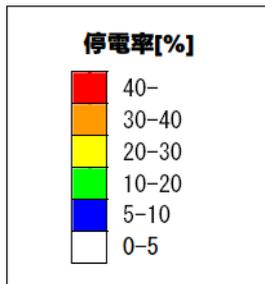
で、再び東京都のホームページにア  
クセスしたら、今度は「東京直下地  
震による東京の被害想定」という報  
告書を見ることができた。

細かい議論をするまでもなく、結  
論は一目瞭然であった。

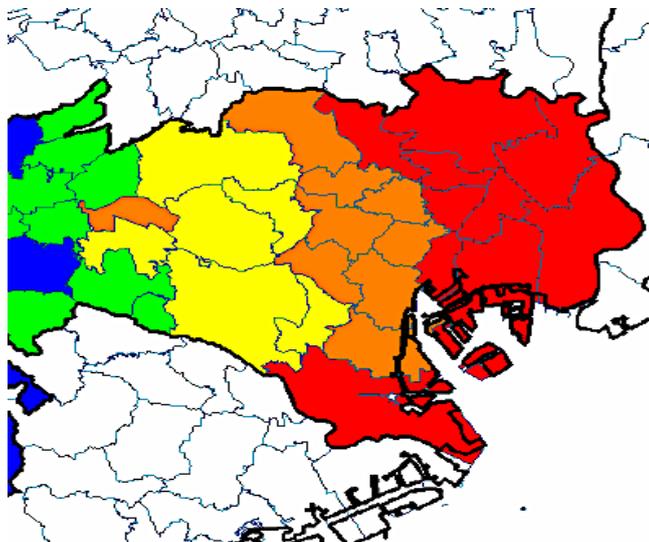
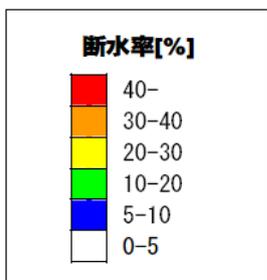
やっぱり「沖積世」の地層と「埋立  
地」は、地盤が揺れやすく、液状化  
の発生しやすい所だった。

M七・三の「東京湾北部地震」に  
よるライフラインの被害想定の結果  
も、これとリンクしていた。



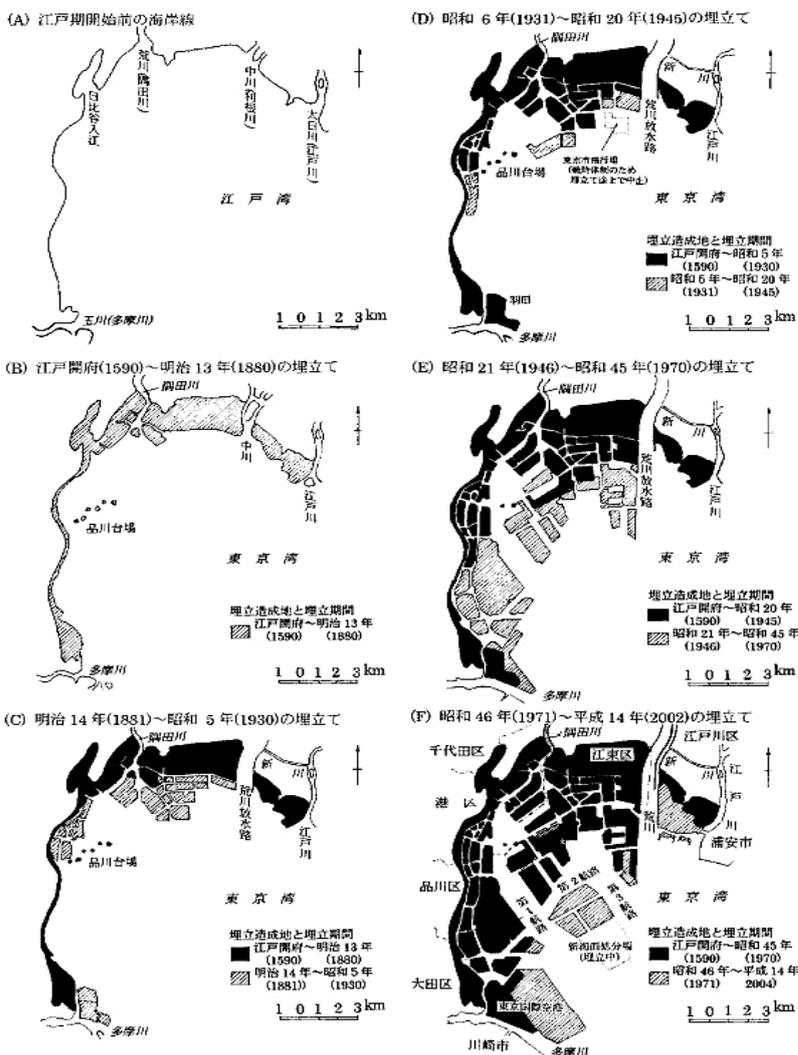


葛飾区、墨田区、荒川区の三区では四割以上が停電、江戸川区と江東区の二区は三〜四割が停電する。



ガスは、葛飾区、江戸川区、墨田区、江東区、中央区、台東区、それと大田区では四割以上が供給停止と

東京臨海部における江戸期開始の1590年から2002年までの埋立地変遷の歴史  
 ——「東京都臨海部における埋立地造成の歴史」遠藤 毅——  
 (「地学雑誌」113(6) 785-801 2004)



なる。上水道も、足立区、葛飾区、江戸川区、江東区、墨田区、台東区、荒川区、中央区、それと大田区では四割以上が断水するという。

東京湾岸沿いの地域には、相次いで超高層ビルが出現している。かつて「十号埋立地」と呼ばれたところ

は江東区有明となり、「十三号埋立地」は江東区青海、港区台場、品川区東八潮となり、「臨海副都心」として開発が進められている。それだけではない。江東区豊洲・東雲、中央区晴海・月島、港区東新橋(汐留)・芝浦・港南(丁R品川駅海側)、品川区東品川(天王洲ザイル)などにも次々とハイテクを駆使した瀟洒な高層ビルが出現している。

これらの地域は、造成時期は違っているが、すべて「埋立地」である。いくら超高層ビルの基盤が地下の深い安定した「東京礫層」にまでも打ち込まれており、安全だと言われても、大地震が起これば、周囲の土地は液状化する。

そうならばインフラは間違いなく  
大きな被害を受け、超高層ビルのハ  
イテク機能も停止するだろう。東京  
では「こうせきせい洪積世」の地層の上に住まな  
ければ駄目だと、一連の資料に目を  
通して再確認した。